

---

---

# 「髪 of 長き女」「髪長き女」「女 of 髪長き」 構造 of 特徴

中古語を对象に<sup>1)</sup>

金 銀 珠

## 1. はじめに

現代日本語で「髪 of 長い人」と表わされる連体修飾構造は、平安時代の日本語では「髪 of 長き女」「髪長き女」「女 of 髪長き」のような言い方で表現される可能性がある。「髪 of 長き女」は現代語の「髪 of 長い女」と同じく、「の」を用いて連体節の主述関係を表す構造で（以下、ノ連体構造と呼ぶ）、「髪長き女」は主語と述語の間に助詞がない構造である（以下、無助詞構造と呼ぶ）。「女 of 髪長き」は主名詞に相当する「女」を主題化して修飾部「髪長き」を体言相当に扱う構造である（以下、準体構造と呼ぶ）。現代語の「髪 of 長い人」のように助詞「の」が「髪」と「長い」の間の主述関係を表す表現は、これまでの研究では「髪が長い人」のように助詞「が」が主語を表す連体修飾節とよく比較され、歴史的研究においても両者を比較した論文は数多く見られる<sup>2)</sup>。これは、歴史的にみれば、助詞「が」がその勢力を拡大し、「の」が担当していた領域を侵食してきているという言語事実からすれば、当然で必要不可欠なプロセスである。しかし、このような研究上の流れは歴史的な変化の勝者を知っている現代人の視点から得られたものでもある。視点を変えて、例えば、平安時代の日本語話者の意識の中で、「髪 of 長き人」が「髪が長き人」だけを意識して使用されていたのかと言えば、そこには大いに疑問が残る。それは、上記のように平安時代の人にとって「髪 of 長き女」は「髪が長き女」のような構造だけではなく「髪長き女」「女 of 髪長き」のような構造でも表すことができたからである。また、平安時代の日本語では助詞「が」は主語を表す助詞としてまだ多く使われるものではなかった。本稿では、このような従来の研究上の問題点を踏まえて、同時代の言語体系に注目し、上記の似通った三つの構造がどのような特徴を持っていたのかについて考察しようとする。また、上記の三つの構造の特徴から、これらの構造の弱さを埋めることができる新たなものにはどのような性質が求められるのかについても

示しておく。

## 2. 考察

考察は、平安時代の文学テキスト資料を用いて、上記の三つの構造に該当する用例を集めて分析する。使用する文学テキストは、うつほ物語（底本：前田家本）、落窪物語（底本：安田文庫本四卷四冊）、源氏物語（底本：大島氏旧蔵、平安博物館所蔵の飛鳥井雅康筆写本）、竹取物語（底本：古活字十行本）である<sup>3)</sup>。分析に入る前に、本稿で考察の対象とする構造について整理しておきたい。

まず、ノ連体構造は「月(X)／の／をかしき(Y)／夜」（源氏 p. 309）、「鶯(X)／の／鳴かぬ(Y)／朝」（うつほ p. 115）のようにXとYが助詞「の」を介在させ、主語述語関係を成し、主名詞にかかっていく用例を対象にしている。準体構造は、次の(1)のように、厳密には主名詞が顕在せず、「の」を介在させXとYの間の主述関係を表す用例を指す。「女の髪長き」は現代語訳だと「女の人で髪が長い人」のようになり、「女の髪長き(φ)」のように主名詞の部分が空白になる。このような構造は形容詞や動詞の連体形が体言に準じる役割をするという意味で「準体」と呼ばれる。準体構造には(2)～(6)のような例が該当する。例(2)～(4)は主名詞に人や者を表すものが補充され、(5)(6)は形式名詞の「の」や「こと」が補充されるものである<sup>4)</sup>。以下の考察では、両者を区別することで特に差が見られなかったため、両者を合わせて準体構造として扱うことにする<sup>5)</sup>。

- (1) [X (体言) の Y (述語連体形)] (φ)
- (2) [人 の 身の才ある] (φ) をなむ学生といふ。(うつほ p. 492)
- (3) [橘の木 の 埋もれたる] (φ) (源氏 p. 369)
- (4) [布 の 太き] (φ) を (うつほ p. 164)
- (5) [人 の あまた知らむ] (φ) は (源氏 p. 176)
- (6) [年 の 重なる] (φ) に添へて (源氏 p. 300)

また、無助詞構造は(7)のようにXとYが助詞の介在無しに主述関係を成し、主名詞にかかっていく場合が多いが（無助詞連体構造、677例）、(8)のようにXとYが主述関係を成すが、かかっていく主名詞が顕在しない準体の例もある（無助詞準体構造、156例）。

- (7) 人(X) 見ぬ(Y) 廊に (源氏 p. 347)
- (8) 心(X) 確かなる(Y) (φ) を選びて (竹取 p. 70)

この無助詞構造も、上記の準体構造同様、無助詞連体構造と無助詞準体構造による差は

見られなかったため、論が繁雑になるのを避け、両者を合わせて無助詞構造として扱うことにする。

以下、本稿では、特に各連体修飾構造の述語部に焦点を当て、その意味的特徴と構造的特徴について考察する。

## 2.1 述語の意味的特徴

本節では、まず各連体修飾構造内の述語の意味的特徴について考察する。

述語はまず、意味的な観点から「形容詞」「非対格自動詞」「非能格自動詞」「他動詞」に分ける。ここで、非対格自動詞は、「ある」「降る」のように意味的にみて意図的な動作主が存在せず、状態主や自然になんらかの変化を被る対象物を主語に取る自動詞である。非能格自動詞は、「踊る」「泳ぐ」のように意図的な動作主による動作・行為を表し、他動詞により近い意味的な性質を持つものである。本稿では、この2種の自動詞の違いをもたらす根本的な違いは、本質的には動詞の意味的性質に根ざしていると見る立場にたち (Van Valin 1990, Dowty 1991, 影山1996, 1999等)、上記のように自動詞を二つに分けることにする。

表1 述語の意味的性質による分布

	形容詞	非対格自動詞	非能格自動詞	他動詞	合計
ノ連体	50 13%	130 34%	33 9%	166 44%	379
準体	90 22%	167 40%	45 11%	113 27%	415
無助詞	367 44%	360 43%	37 4%	69 8%	833

表1は、各構造における述語の意味的性質による分布を示したものである。

表1を見ると、無助詞構造の使用が突出して多く(833例)、ノ連体構造と準体構造をはるかに超えている(順に379例、415例)。また、無助詞構造の述語には形容詞(44%)や非対格自動詞(43%)がほとんど使われており、非能格自動詞(4%)や他動詞(8%)は少数にとどまるという際立った特徴が見られる。現代語の「髪の長い女」や「雨の降ること」「お金のある人」のような述語が形容詞、非対格自動詞の用例は平安時代の文学作品では「髪長さ女」「雨降る日」「お金ある人」としても現れる可能性が高いということである。意味的に見て、形容詞は動作主がなく状態を表し、非対格自動詞は動作主による動作ではなく、状態や変化を表すという点で両者は共通する。統語的に見ても、形容詞と非対格自動詞は「～が長い」「～が降る」のように主語1項を必須項として取るという共通点がある。また、非対格自動詞の主語は動作主ではなく、自然になんらかの変化を被る対象物、あるいは状態主としての対象物である。このような非対格自動詞と形容詞がとる主語の意味的性質は、他動詞の目的語が動作主の働きかけや状態変化、位置変化等の変化を被る対象物であるのと類似する。一般に非対格自動詞の主語が

他動詞の目的語に相当する対象物と見なされるのは、このような意味的な側面の共通点があるからである。このように、無助詞構造の述語が形容詞、非対格自動詞に集中する傾向を、本稿では「非対格性」と呼ぶことにする(金2009a参照)<sup>6)</sup>。金(2009a)でも述べたように、このような無助詞節における述語の非対格性を裏付ける現象に、連体修飾部の複合語化現象が指摘できる。無助詞節は「本意なきこと」(落窪 p. 367)、「あぢきなきこと」(源氏 p. 286)、「限りあること」(源氏 p. 121)のように、節内部の主語名詞句と述語が全体として複合語化している例が多く観察される(無助詞節全833例中277例、33%)<sup>7)</sup>。例えば「本意なき」は不本意である、期待はずれであるという意味を表すが、本来は「本意ゆなき」の2語で本来の意志や目的がないという意味であったのが全体として一つの複合語のように用いられる例である<sup>8)</sup>。無助詞節で主語と述語が複合語化している例が多く見られるのは無助詞節の述語に見られる「非対格性」の性格に起因するものと考えられる。すなわち、「対象」は述語と一番密接な関係にあり、動詞と結びついて一体化しやすいものである。これは現代語の複合語化現象にも見られるものである。影山(1999)によると、現代語で「肩こり」「胸騒ぎ」「子育て」のような動詞から由来する複合名詞の場合、「子育て」が子が育てるではなく、子を育てるという意味になるように、動詞は「対象」を表す項とだけ結合できることが指摘されている。

また、無助詞構造は前述のように、準体構造と連体構造にさらに分けることができるが、準体と連体の構造の違いによる述語の分布にはほとんど差がなかったため、合わせて示している(詳細は注9)を参照)<sup>9)</sup>。

次に、ノ連体構造は、述語が他動詞(44%)の場合が最も多く、次に非対格自動詞(34%)、形容詞(13%)、非能格自動詞(9%)の順に現れ、他動詞の用例が比較的多く用いられているという特徴がある。準体構造においては、非対格自動詞が最も多く用いられ(40%)、非対格自動詞と類似した意味的性質をもつ形容詞(22%)と合わせて6割程度の分布を示している。しかし、形容詞、非対格自動詞の意味的性質とは異なり、動作主による意志的な動作を表す他動詞(27%)と非能格自動詞(11%)も合わせて4割程度を示しており、語類による偏りは特に見られない。上記のようにノ連体構造の場合、他の構造より他動詞の占める割合が高いというのが特徴的だが、ただし、他動詞の性質をみると、これには偏りが見られる。これは、無助詞構造と準体構造の他動詞においても同様のことが観察されるので、以下、まとめて考察することにする。次の表2は、各構造における他動詞を意味的性質によって分類し、その分布を見たものである。

表2 他動詞の性質による分布<sup>10)</sup>

	主体動作 <sup>11)</sup>		知覚・感覚		所有・状態		主体動作・客体変化		合計
ノ連体	90	54%	43	26%	8	5%	25	15%	166
準体	61	54%	39	35%	8	7%	5	4%	113
無助詞	30	43%	29	42%	6	9%	4	6%	69

表2の主体動作動詞は、「言ふ」「のたまふ（おっしゃる）」「奏す（演奏する）」「す（する）」のような主体の動作を表す動詞で、知覚・感覚動詞は「思ふ」「見る」「聞く」「知る」のように、主体の知覚・感覚活動の状態を表す動詞である。所有・状態の動詞は「得る」「待つ」「持つ」のような主体の所有や状態を表す動詞である。主体動作・客体変化動詞は「植う（植える）」「開く（開ける）」「つくる」「奉る（献上する）」のように主体の動作によって対象物の客体に変化を生じさせる動詞である。一般に、他動詞がもつ性質（以下、他動性と呼ぶ）は、意味的にみると、主体の意志的動作により対象物に変化をもたらすべくはたらきかけるのが典型的で、上記の動詞群の中でこの性質をもつのは、主体動作・客体変化動詞である。このような他動詞がもつ他動性という観点から表2を見ると<sup>12)</sup>、ノ連体、準体、無助詞のいずれの構造も主体動作・客体変化動詞の使用率が非常に低いことが特徴的である（順に15%、4%、6%）。表2を見ると、ノ連体、準体、無助詞構造に用いられる他動詞の多くは主体動作動詞と知覚・感覚動詞である。この中で、「言ふ」「す」のような主体動作動詞は主体の動作を表すだけで、対象物の変化には関与しない。また、「思ふ」「見る」のような知覚・感覚動詞は主体の動作自体がなく、知覚・感覚活動の状態を表すものである。「得る」「持つ」のような所有・状態の動詞も主体の動作自体がなく、状態を表すものである。このようなことから表2でわかるのは、各構造で用いられている他動詞は他動詞といっても主体の動作そのものや状態を表すという、他動性のより低い意味的性質をもつ他動詞に偏っているということである。このような傾向を、本稿では「意味的他動性制約」と呼ぶことにする。

## 2.2 述語の構造的特徴

次に、上記のような意味的な他動性制約の性質と関連して、次に、他動詞がもつ他動性の対象を構文的に表示するヲ格の介在という観点から、各構造を見ることにする。周知のように、平安時代の日本語は格助詞を明示しない場合が多く、これは、各構造のヲ格の表示においても例(9)のように同様のことが観察される。しかし、中にはヲ格を表示する例(10)のような場合もある。

(9) 幼き人のかかること（ $\phi$ ）言ひ伝ふるは（源氏 p. 186）

(10) 俊陰、はじめよりのことを詳しく申すときに（うつほ p. 30）

本節では、(9)のようにヲ格を明示しない場合と(10)のようにヲ格を明示する場合をそれぞれでヲ格と呼ぶことにする。それぞれの構造に他動詞が用いられる場合、(9)と(10)のようにヲ格が連体構造内に存在する例もあるが、次の(11)のようにヲ格が連体修飾部の外側に出され、連体構造内の述語に直接支配されない場合もあり、(12)のようにヲ格自体が連体構造の内側にも外側にも表示されない例もある。

(11) 仲忠、[七人の人の調べたる] 大曲、残さず弾く。(うつほ p. 533)

(12) [忠こそ奏する] ままになむ (うつほ p. 230)

(9)と(10)のようにヲ格が連体構造の中にあるものを「ヲ有り」、(11)と(12)のように連体構造の外側にあるかまったく示されないものを「ヲ無し」とし、各連体構造における「ヲ有り」と「ヲ無し」の分布を示すと、次の表3のようになる<sup>13)</sup>。

表3 他動詞におけるヲ格介在の有無

	ヲ有り		ヲ無し		合計
ノ連体	13	8%	153	92%	166
準体	20	18%	93	82%	113
無助詞	4	6%	65	94%	69

表3を見ると、ノ連体、準体、無助詞構造のいずれの場合においても、連体修飾部内にヲ格が介在しない(11)(12)のような用例が大多数を占める(順に92%、82%、94%)。また、ヲ格が(9)(10)のように連体構造の内側に示されている用例と、(11)のように外側に示されている用例はいずれも、ヲ格が連体構造の内側か外側のどちらかに存在する。この場合、ヲ格は連体構造の内側と外側のどちらにあるのかを調べてみると、次の表4のようになる。準体は連体構造の内側しかないので、表4はノ連体構造と無助詞構造だけが対象になっている。

表4 ヲ格が表れている場合の内側と外側の分布

	節の内側		節の外側		合計
ノ連体	13	12%	92	88%	105
無助詞	4	31%	9	69%	13

表4をみると、ヲ格が連体構造の内側と外側のどちらかにある場合、ノ連体構造と無助詞構造共にヲ格を外側に出す用例が多い。特に、ノ連体構造は他動詞が最も多く用いられている構造であるから、ヲ格が修飾部内に自由に現れてもよさそうであるが、実際は修飾部の外にヲ格が取り出されることによって、修飾部内で述語が直接的にヲ格を支配する構造ではなくなっている用例が多いことがわかる。このような傾向は、現代語の

「の」が主語を表す連体修飾節において見られる傾向を思い出させる。現代語の「の」が主語を表す連体修飾節では、例えば、ヲ格は「ジョンの本を買った店」のように連体修飾部の主語と述語の間に介在しにくく、「ジョンの買った本」のように主名詞として連体修飾部の外側に出されると問題なく許容されることが指摘されている (Watanabe 1996)。現代語のこのような傾向は「他動性制約」(transitivity restriction, Watanabe 1996)と呼ばれている。本稿では、以上、中古語において観察した「連体構造内部にヲ格が表れにくく、ヲ格がある場合、連体修飾構造の外側に出される」傾向を、前述の意味的他動性制約と区別して、「構造的他動性制約」と呼ぶことにする<sup>14)</sup>。

以上、本節の結果を現代語の表現と比較して整理すると、次の表5ようになる。表5を見ると、無助詞構造は最も制約が多く、形容詞や非対格自動詞以外に、非能格自動詞、他動詞のような語類はあまり用いられない(非対格性)。また、他動詞が表れるとしても、意味的に他動性が強い他動詞(作る)は表れにくく(意味的他動性制約)、構造的にヲ格(パン)が連体構造内に現れにくい(構造的他動性制約)。ノ連体構造と準体構造は、無助詞構造より語の性質による制約は少ないが、意味的他動性制約と構造的他動性制約がある点で、なお、構造的な弱さがある。

表5 各連体構造の表現傾向と制約

	ノ連体構造	準体構造 <sup>15)</sup>	無助詞構造
髪の高い女	髪の長さ女	女の髪長さ	髪長さ女
雨の降る日	雨の降る日	雨の降る	雨降る日
彼の走る道	彼の走る道	彼の走る	彼走る道
彼の言うパン	彼の言ふパン	彼の言ふ	彼言ふパン
彼の作るパン	彼の作るパン	彼の作る	彼作るパン
彼のパンを食べる日	彼のパン食ふ日	彼のパン食ふ	彼パン食ふ日
	↓	↓	↓
	意味的他動性制約 構造的他動性制約	意味的他動性制約 構造的他動性制約	非対格性 意味的他動性制約 構造的他動性制約

(※例文の上の横線：表れにくいことを意味する)

### 3. おわりに

以上、本稿では、中古語におけるノ連体構造、準体構造、無助詞構造の述語部における意味的・構造的な特徴について考察した。本稿で得られた結果を整理すると、これらの三つの構造は、共に意味的には「意味的他動性制約」を持ち、構造的には「構造的他動性制約」の特徴を示していた。さらに、無助詞構造はこれに加えて「非対格性」という

制約もあった。これら三つの構造は、いずれも他動性の表示に意味的にも構造的にも弱いという特徴が見られる。このことからすると、これらの構造の弱さを埋めることができる新たなものは、他動性の表示により強いものが望ましい。日本語の歴史的变化は、主格を表示する形態として「が」が勢力を拡大し、無助詞構造、準体構造は消滅していった。これは、主節だけではなくて、連体修飾構造における主格の表示も同様の变化を辿っている。このようなことから、「が」が連体修飾構造の主格表示の助詞として勢力を拡大していったのは、本稿で考察した意味的・構造的他動性の表示とどのように関わっているのか、という問題設定をすることが可能になる。「が」は意味的・構造的他動性表示において、どのような傾向を示していたのかについて、今後追究していく。言語体系は、同じような基準で把握できる単純なものではなく、もっとダイナミックで、お互い関連しながら変化していくものと考えられる。本稿で行った同時代の体系に注目する手法を採用すると、新たな視点が見えてくる。

本稿では上記の三つの構造の述語部に注目しているが、各構造の被修飾語においても興味深い現象が観察される。これについては稿を改めて論じたい。

## 注

- 1) 本稿は金 (2008)、金 (2009a) を補充修正したものである。
- 2) 本稿の課題と直接関連しないので詳しく挙げないが、「が」と「の」を比較し、歴史的な流れを検討した代表的なものには、文構造の面から考察を行った桑山俊彦氏の一連の論文、主語の尊卑の問題に注目した江口正弘氏の一連の論文、述語の性質に注目した山田昌裕氏の一連の論文を挙げる事ができる。いずれも「が」「の」を比較するのみで、同時代に使われていた他の構造との関連性を論じたものは見当たらない。
- 3) 源氏物語、落窪物語、竹取物語—日本古典文学全集 (小学館) による。うつほ物語—新編日本古典文学全集 (小学館) による。源氏物語、うつほ物語は、それぞれ第一巻を対象としている。これは、落窪物語、竹取物語との量的なバランスを考慮したためである。
- 4) これは順に、石垣 (1942) の「形状性名詞句」と「作用性名詞句」という準体句の区別に相当する。
- 5) 両者を区別しないのは、準体構造の意味の違いが構造自体の違いによって生じるというより、文脈と構文的条件が構造の意味を左右していると考えられるためでもある。  
 (2)~(4)の準体節については、近藤 (2000) のように「主格ではなく属格 (連体格・所有格) の助詞であると考えるのが適切である」(p. 341) とする論もある。確かに、意味的には準体節内の述語句に対する実質的な被修飾語が主語名詞である点では「属格助詞」の解釈が可能である。しかし、例えば(2)が意味的には「身の才ある人」のような構造が可能であるにもかかわらず、「人の身の才ある」の配列として現れているという構文構造を無視することはできない。つまり、「の」で繋がれる名詞句と述語句が主述の関係を成しており、たとえ、同格節の「の」を属格助詞と見なしてもこのことには変わりがないのである。
- 6) 無助詞節の非対格性と関連して、高山 (2002) では源氏物語の連体修飾句においてハダカ格 (本稿の無助詞) が主語を表す場合と「の」格が主語を表す場合の用例を調査し、ハダカ格は「より内項主語表示として用いられる傾向」(p. 239) があることを報告している。高山 (2002) は動詞だけ

を対象にしており、直接比較はできないが、内項とは非対格自動詞の主語が含まれるので、表1の結果を支えるものと言える。

- 7) 無助詞節で主語と述語が一語化している用例は「名高き御帯」(源氏 p. 396)、「限りあること」(源氏 p. 121) のように述語が形容詞、非対格自動詞であり、中でも特に「本意なきこと」(落窪 p. 365) のように述語が「なき」の例が多い(全277例中121例)。
- 8) 辞書の見出しでは「本意無し」の一語として扱われているものが多い。
- 9) 無助詞構造の中で「人立ちぬるほど」(落窪 p. 240)、「足白き盗人」(落窪 p. 124) のような無助詞連体構造は、全677例中、形容詞45%(306例)、非対格自動詞42%(287例)、非能格自動詞5%(31例)、他動詞8%(53例)の分布を示す。また、「心確かなる(を選て)」(竹取 p. 70)、「かくて年月経る(に)」(落窪 p. 93) のような無助詞準体構造は、全156例中、形容詞39%(61例)、非対格自動詞47%(73例)、非能格自動詞4%(6例)、他動詞10%(16例)の分布を示し、無助詞連体構造と類似した分布の傾向を示している(金2009a 参照)。
- 10) 他動詞の分類は工藤(1995)を参考にした。
- 11) 主体動作動詞の中には、主体の動作と主体の変化を表す再帰動詞(工藤1995)「着る」の例を含めた。無助詞構造に1例、連体構造に5例見られる。再帰動詞「着る」を主体動作動詞の中に入れたのは、その数が少ないことと、動作主による動作に注目し、結果的に主体に変化が起きることを表すという点で、主体動作動詞と類似した性質をもつと考えられるためである。
- 12) 他動性を測る基準としては Hopper & Thompson (1980)、ヤコブセン (1989)、角田 (1991, 2005) を参考にし、「参加者二人以上」「意志性」「動作性」「対象変化」の四つの要素を考慮した(金2009a 参照)。
- 13) 表3で「ヲ有り」の場合、ヲ格とは連体形の動詞に直接支配されるヲ格を言う。例えば、「上野の宮(中略)と声を放ちてのたまふ時に」(うつほ p. 312)の例でヲ格の名詞句「声を」は無助詞構造内に存在するが、この連体修飾節の直接的な述語は「のたまふ」である。従って、連体修飾節の直接的な述語に支配されない「声を」は「ヲ有り」にカウントされない。これは、表4においても同様である。
- 14) ちなみに現代語の場合、「の」が主語を表す連体修飾節部内の主語と述語の間にはヲ格だけではなく介在要素そのものを排除し、主語と述語だけが現れるという傾向が見られる(金2009b 参照)。
- 15) 準体構造の「雨の降る」以下の例文は、「雨の降ること(の)」「彼の走ること(の)」「彼の言ふこと(の)」「彼の作ること(の)」「彼のパン食ふこと(の)」のように、意味的に「こと」や「の」が補充される場合を想定している。

## 参考文献

- 石垣謙二(1942)「作用性用言反撥の法則」『国語と国文学』(『助詞の歴史的研究』1955, 215-238, 岩波書店所収)。
- 影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版。
- 影山太郎(1999)『形態論と意味』くろしお出版。
- 金銀珠(2008)「連体修飾構造における主格助詞「の」の変化—中古語と現代語との比較—」『HERSETEC テキスト布置の解釈学的研究と教育』1-2, 57-72 名古屋大学大学院文学研究科。
- 金銀珠(2009a)「中古語の連体修飾構造における無助詞主語と「の」格主語—非対格性と他動性回避—」『HERSETEC テキスト布置の解釈学的研究と教育』2-2, 71-86 名古屋大学大学院文学研究科。
- 金銀珠(2009b)「現代語の連体修飾節における助詞「の」」『日本語科学』25, 23-42 国立国語研究所。
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房。
- 近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房。

- 高山道代 (2002) 「源氏物語における主格表現としてのハダカ格とノ格について」『人間文化論叢』5, 231-241 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版.
- 角田太作 (2005) 「他動性の研究の歴史と今後の期待」『言語』34-8, 51-57 大修館書店.
- ヤコブセン, ウェスリー・M (1989) 「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』213-248 くろしお出版.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax*. Reidel.
- Dowty, D. R. (1991) "Thematic Proto-Roles and Argument Selection." *Language* 67, 547-619.
- Hopper, P. J., and S. A. Thompson (1980) "Transitivity in grammar and discourse." *Language* 56-2, 251-299.
- Van Valin, R. D., Jr. (1990) "Semantic Parameters of Split Intransitivity." *Language* 66, 221-260.
- Watanabe, Akira. (1996) "Nominative-Genitive Conversion and Agreement in Japanese: a Cross-Linguistic Perspective." *Journal of East Asian Linguistics* 4, 373-410.